2011年10月24日 中日新聞 朝刊 29頁

物流停滞 いら立つ市民

東日本大震災の発生直後から、被災地は深刻な燃料不足に陥った。支援物資を運ぶトラックすら軽油が手に入らず、ガソリンスタンドで長蛇の列をつくる市民は殺気立ち、従業員に詰め寄った。競争が激しい石油業界の合理化が燃料不足に拍車をかけた背景もあった。（中村禎一郎、後藤孝好）

「生きるか死ぬかの問題」

運送会社「東日運送」（仙台市）の統括本部長、庄司雄大さんにとって、震災発生からの半月は燃料確保との闘いだった。

同社は震災翌日から、「支援物資の運搬に協力してほしい」という仙台市の要請に応じ、各地の避難所に物資を届けた。引っ越し業務などに使う四トントラックを最大で五十五台投入。従業員は避難所で「特に必要な物は？」と尋ね、生理用品や粉ミルクなど個別の要望にも対応した。

自社タンクにあった軽油を抜いた。

燃料の軽油は一週間で底をついた。市に軽油の確保を頼み、指定されたガソリンスタンドへ。ところが「緊急車両でない」と給油を断られた。混乱の最中、情報が伝わっていない時間の問題だった。

それでも軽油の枯渇は時間の問題だった。「人が生きるか死ぬかの問題。燃料がないから物資を運べない」と訴えた。

宮城県東松島市で、ガソリンスタンドを経営する「カガク興商」石油販売部長の中川忠彦さん（五七）が、ガソリンを求める市民の中ため奔走していた。

受け、窮状を訴えた。

数日後の三月二十二日ごろ、状況は変わった。「京都から、大阪から百台以上の車が並び、十リットルに限定しても、午前中に売り切れた」と同日夕。「横浜の当時を、そう振り返る。

ハンドルを回し、手動で給油するガソリンスタンド店員＝3月13日、宮城県内で

三月十六日、スタンドのがれきを早く取り除くよう市役所に依頼。市は承諾したが、「スタンドを再開した。緊急車両用として身内を捜ほしい」と求めた。

「市民に油を提供しなは車で家族を捜せず、暖も取れない事態が続いた。

海江田万里経済産業相（当時）は十七日、西日本の石油生産量を引き上げ、日本海側ルートで東北に送ると発表。西日本や関東の在庫を取り崩し、東北全体の必要量三・八万キロリットルを確保した。タンクローリー三百台も西日本から送り込み、石油不足は徐々に解消された。

物流が滞った背景には、業界への新規参入に大臣許可を定めていた石油業法を二〇〇一年に廃止したことが挙げられる。商社や農協が参入し、厳しい価格競争にさらされた各石油会社は業務を大幅に効率化した。

十年前に全国で約一万台あったタンクローリーは震災時、五千台にまで減少。一九九三年に六百カ所あった油槽所は二〇〇四年に百九十カ所になり、スタンド数も十年前の三分の二に減っている。

石油連盟の橋爪吉博専務理事は「被災地に三百台のタンクローリーを送れたということは、その分無駄があったということ。いずれ、それも削らざるを得なくなる」と指摘する。

東海、東南海、南海の三連動地震が起きた際、同じ事態は生まれないのか。資源エネルギー庁石油精製備蓄課は「油槽所への非常電源設備の取り付けや必要以上のタンクローリーにかかる経費など、国で支援する方法を考えている」と説明する。だが、鉄道や高速道路、港湾が壊滅した際、どう燃料を運ぶのか。本格的な対策は示していない。

いと暴動が起きるぞ！」と言い返した。

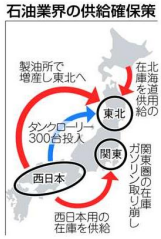
スタンドは三日後の十九日に再開。開店前に、ガソリンを入れて渡したこともあった。

「地元のスタンドとして責任を果たしたい。それだけだった」。中川さんは無我夢中だった当時を、そう振り返る。

次回は、障害者の避難について考えます。

石油施設の被害状況

石油業界の供給確保策



油槽所被害 在庫石油 取り出せず

なぜ被災地で燃料が不足したのか。

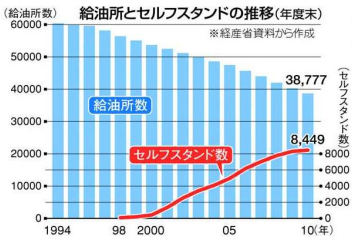
海外から輸入した原油は通常、製油所で精製した後、各地の油槽所で保管される。資源エネルギー庁による「被災地向けの供給を」と、震災発生時、大規模停電や揺れを感知した自動停止により、青森県から東京都にかけて太平洋岸の油槽所がほぼ機能を停止。石油が取り出せない状態になった。東北三県に唯一立地する仙台市の製油所も停止した。

同庁は震災翌日の十二日朝、大手石油会社でつくる石油連盟に「被災地向けの供給をしっかりしてほしい」と連絡した。

国内の原油処理能力は一日当たり七十七万キロリットル。震災で止まった製油所の製油量は、その二割程度の十六万キロリットルだった。石油連盟の藤井進広報委員は言う。「石油は十分にあった。でも、運べなかった。津波で港湾が破壊され、タンカーが着岸不能に。道路も寸断された。」

被災地自治体、供給能力を失っていた。

東北三県では七百台のタンクローリーがあったが、津波で流されたり運転手も被害に遭い、実際に稼働していたのは数十台程度といわれる。市民



各社価格競争 タンクローリーも半減

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています

2011年10月24日 中日新聞 朝刊 29頁

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています

2011年10月24日 中日新聞 朝刊 29頁

行事続き 身体が悲鳴

秋の気配が強まってきた10月中旬、沙也加さんが突然、体調を崩した。せきが止まらず、腹痛も治まらない。結局、週末を挟んで4日間、布団で寝て過ごす羽目になった。

10月に入って学校行事がめじろ押しだった。1カ月遅れの運動会の数日後、一度は中止になった修学旅行が続いた。東京での2泊3日の日程を沙也加さんはそれなりに楽しんだ。浅草、ディズニーシー…、つまらないわけがない。間もなく身体が悲鳴を上げた。

単なる肉体的な疲労ではないらしい。運動会のテーマは「お世話になっている会津若松の人たちにお礼を言おう」。もちろん感謝してないわけじゃない。けれども、感謝の気持ちは自発的に起きるもの。学校に強制されるものじゃない。

いつの日か
原発1キロからの避難
—20—

月末には文化祭も控える。友だち同士で交わした会話を要約すれば「正直、文化祭って気分じゃないよね」。

そもそも、学校はすべてを「震災前」にしたがっているように思える。被災もして、避難生活も強いられてこれまで通りのはずがない。それなのに、先生は「がんばろう」「前を向こう」のひと言で片付けてしまう。

幸さんはそんな娘の気持ちをおもんぱかる。「大人の都合で、子どもが振り回されているのではないか」。せめて、家庭だけは子どもが安らげる場でありたい。隣では沙也加さんが寝息を立て始めた。

塙（はなわ）さん一家　原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生活。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています